高等学校の「総合的な学習の時間」の充実について

筑波大学附属坂戸高等学校長　服部次郎

一　「総合的な学習の時間」の導入を巡る学校現場の状況

平成十五年度入学生の教育課程から高等学校においても「総合的な学習の時間」の導入が始まった。筆者の勤務するような総合学科高等学校では、「産業社会と人間」や「課題研究」などの科目開発に際して、すべての教科・科目の担当者が協力し合って横断的・総合的なカリキュラムを開発していく経験を持った。異なる教科・科目の教員達が、それぞれの専門性を踏まえて知恵を出し合い、生徒達に学ぶ喜びを体験させ、学ぶ意欲を喚起させる学習活動を創造した。さらには横断的・総合的なカリキュラムの開発が教師集団の閉鎖性をも打破して学校を活性化させるに有効

であることも知った。それゆえ、「総合的な学習の時間」の導入に対して今更の抵抗感はないが、一般的な高校現場の受け止め方は必ずしも歓迎的ではないようである。総合学科においては、「産業社会と人間」や「課題研究」の実践を発展させる形で、また、専門学科では総合学科よりも長い実践経験を持つ専門科目「課題研究」の実績を生かして、「総合的な学習の時間」の導入が進んでいるが、まったく教科・科目主義の城を築いてきた普通科においては、必ずしも導入はスムーズとは言えないようである。

文部科学省は、平成十五年六月に「学校教育に関する意識調査」を実施し、その中で、実施後一年を経た小学校・中学校における「総合的な学習の時間」の受け止め方についても質問している。それによると、「総合的な学習の時間」の導入による児童・生徒の変化について聞いたところでは、中学校教員の回答は、おおよそ以下のようである。（「そ

う思う」「どちらかといえばそう思う」を肯定的回答、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を否定的回答として二分した。残りの％は「わからない」「無回答」である。）

①自ら学び自ら考える力などの主体的な学習態度や意欲が高まった

肯定的　３９．０％　否定的　４９．３％

②思考力や判断力、表現力を身に付けた

肯定的　４０．１％　否定的　４７．５％

③学校で学ぶ知識等を生活の中で実感を持って理解することが増えた

肯定的　２７．６％　否定的　５８．２％

④「総合的な学習の時間」で得た興味や関心などから、教科の勉強を熱心にするようになった

肯定的　１５．７％　否定的　７０．３％

⑤体験や活動をさせるのに精一杯で、児童生徒が学習意欲も含めた学力を十分に伸ばすことができなかった

肯定的	否定的
50.5%	37.6%

まだ実施一年目ということを差し引いても、中学校における「総合的な学習の時間」導入の混乱状況がうかがえる。特に④の結果には、現場教員が「総合的な学習の時間」を「教科・科目の学習」とは対立するものとして捉えている実態がうかがえるし、⑤の結果は、「総合的な学習の時間」を、生徒に自然体験・就業体験やボランティア活動をさせる学習活動の形式においてのみ捉えていて、「教科・科目の学習」とは異質のものと考えている実態がうかがえる。実際のところ、高校現場でも、「総合的な学習の時間」の導入によって、「教科・科目の学習」の時間が減ることを憂う声の方が強い。「中途半端な体験やボランティア活動をさせるより、英単語を憶えさせた方が生きる力の育成にはよほど役に立つ」と言ってはばからない教員はたくさんいる。高等学校での調査は、中学校よりも悲惨な結果になることが予想される。

二　「総合的な学習の時間」のねらい

言うまでもないが、「総合的な学習の時間」は、「教科・科目の学習」と対立したり、否定したりするものではない。もう一度、高等学校学習指導要領における「総合的な学習の時間」のねらいを見てみよう。

（1）自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

（2）学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

このねらいのどこが「教科・科目の学習」のねらいと矛盾するのであろうか。「教科・科目の学習」の担当者が自らの教科・科目の授業を通じて生徒に身に付けさせようとしていた資質や能力や態度は、右に述べられたものと違うものだったのか。課題解決能力とか

学び方や考え方は、「教科・科目の学習」で

は身に付けられないものだったのか。

一方で世上に賑やかな「学力低下論」に便乗して「総合的な学習の時間」を邪魔にする声もある。「体験だのボランティア活動だのやっているより、学力向上の方が大事だ」というわけである。これも違うだろう。低下しているのは、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断して、問題を解決していく能力」としての学力なのである。問題解決や探求活動に主体的に創造的に取り組む態度の欠如が、低下している学力の実体なのである。

三　「教科・科目の学習」の本質

なぜ、学力低下が叫ばれるようになってしまったのか。「教科・科目の学習」がその本質を見失ってしまったからである。学びは疑問や不思議体験から始まる。素朴な疑問や不思議体験を時間をかけて調べたり、なぜかを

考え続けていくことによって、論理的で知的な理解に到達し、わかったときの喜びは、学ぶことへの意欲を喚起し、さらなる知識の探求に向かわせる。自らで学び考えた知識・技術は、自らの生きる力としての学力として身に付いていく。こういう「教科・科目の学習」の本質が歪められてしまった。今更ではあるが、「受験のための教科・科目学習」になってしまったことが、今日叫ばれる学力低下の原因である。

受験勉強の経験のある者にはわかっているが、学ぶ意味とか、問題設定への疑問とか、なぜ答えは一つなのかなどを考えたら、受験勉強はできない。ひたすら志望の大学の過去問を解き、暗記し、予想問題集を解いて、暗記する。大学進学の意味や、人生の目標や、学ぶ喜びは、大学に合格してから考えよう、志望の大学に合格しなければ人生は始まらない。できるだけ深い疑問は持たずに、受験問題の解き方に練達することが大学合格への道

である。受験勉強において、学ぶことは喜びではなく、合格のために堪え忍ばねばならない苦しみである。苦しみに耐えて、より多くの受験問題に練達したものが大学合格の勝利を手に入れることができる。そして、より偏差値の高い大学へより多くの合格者を出した高等学校が進学名門校として褒め称えられるのだから、「教科・科目の学習」は、素朴な疑問や不思議体験とは関係なく、学ぶ喜びや主体的に取り組む態度に関係なく、苦しみに耐えて、疑問を押さえて、非主体的に受験問題の解き方を暗記させる時間とならざるを得ない。

「学力低下」の問題は、大学へ入ってしまえば、すべての目的は達成されたかのように、学びの意欲を失って、遊びにふける大学生の姿を嘆いた大学教員から発せられた。高校教師側からすれば、大学入試が諸悪の根元であると思うのだが、たしかに受験のノウハウに終始する「教科・科目の学習」からは、自ら

学び自ら考え主体的に取り組む資質や能力は育成されない。筆者は、国立大学の附属高校で、長い間、教育実習生の指導をしてきたが、彼らの授業が「これは試験に出るからね」というフレーズで進行していくことには閉口した。「試験のために勉強するわけじゃないだろう？」と指導すると、きょとんとして、「えっ？じゃあ、なんのために勉強するんですか？」という顔をする大学生をたくさん見てきた。学びへの意欲を喚起する手段が目前の定期試験であり、果ては大学入試であるというのは、現実的にはわかりやすいし、生徒を駆り立てるに有効ではあるが、それが「教科・科目の学習」の目的となってしまった高校教育の病弊は明らかである。大学教員の嘆く「学力低下」の根元は、ここにあることも明らかである。

四　「教科・科目の学習」における「総合的な学習の時間」化

「総合的な学習の時間」の学習活動は、自然体験やボランティア活動、就業体験などの体験学習、問題解決学習を取り入れるように学習指導要領に指示されている。そこから学校現場では、「総合的な学習の時間」は生徒に「体験をさせる時間」という形式のみの導入が進んでいる。農場に生徒を連れて行って「農業体験」をさせる、福祉施設に生徒を連れて行って「介護体験」をさせる、近隣の企業に依頼して「就業体験」をさせるなど、教室から連れ出してなにかを体験させれば「総合的な学習の時間」は済んだということになりがちである。それは労多くして、意味の見えない空しい学習活動である。そこから「こんな無駄なことをしているから学力が低下するんだ」という現場教師の八つ当たり的実感が生まれる。

しかし、「体験させる」ことが「総合的な学習の時間」の最終的な目的ではないことは言うまでもない。体験は「総合的な学習の時

間」の出発点である。体験から生徒がなにを感じ、なにを課題として捉えたか、その課題をより深く理解するために調査・研究し、知的理解に高めて、課題解決の方策を立てるなどの総合的な知の獲得に導いていくことが「総合的な学習の時間」の目的なのである。

筆者は、当初から言ってきたことであるが、この際、形ばかりの「体験学習」にこだわらずに、各教師が自らの「教科・科目の学習」を「総合的な学習の時間」の視点で再構築することを提案する。もう一度言うが、「総合的な学習の時間」のねらいは、「教科・科目の学習」と対立するものではない。むしろ、「教科・科目の学習」が大学受験という単一的な目的のために見失ってしまった学びの本質を取り戻すための刺激剤として投入されたものである。学びは疑問や不思議体験から始まる。この学びの本質を取り戻すために各教師は「総合的な学習の時間」を活用して、自らの「教科・科目の学習」を「総合的な学習

の時間」のねらいで見直すことを勧める。生徒の疑問や不思議体験を受け止め、自らの「教科・科目の学習」に取り込んで、生徒に学ぶ喜びを体験させ、生徒の学習意欲を喚起させられる面白いカリキュラムを開発してほしい。教科・科目主義の蛸壷状態では捉えきれない横断的。総合的なカリキュラムの有効性が見えてくる。そこから学校全体での「総合的な学習の時間」への主体的な取り組みも可能になっていくのではなかろうか。

普通科や専門学科で学校全体の「総合的な学習の時間」を導入する際に、もっとも容易であるのは、「産業社会と人間」の導入である。総合学科十年の先駆的実践で開発された「産業社会と人間」には、「総合的な学習の時間」の要素がすべて詰まっている。普通科や専門学科の生徒達にも、「自分はなんのために、なにに向かって、なにを学ぶべきなのか」を考えさせるところから高校生活を始めさせてほしいと願うものである。